

⑥ よろんじま 与論島 (鹿児島県与論町) — 与論高等学校

中高一貫校の特色を生かした 離島留学へ

与論中・高等学校全学年二学級存続プロジェクト委員会 事務局長 田畑豊範

● 創立五〇周年を迎える与論高校

与論島は、鹿児島県の最南端に位置し、平均気温は二三度と暖かく、温暖な気候を活かしたサトウキビ、花き栽培、畜産などが行われています。

この小さな南の島に、永年の町民の願いだっただ高校が設立されたのは昭和四二年。奄美大島にある県立大島高校の分校として、与論中学校の一室を間借りして授業を開始し、翌四三年に一部校舎が完成、同四六年には鹿児島県立与論高等学校として独立しました。



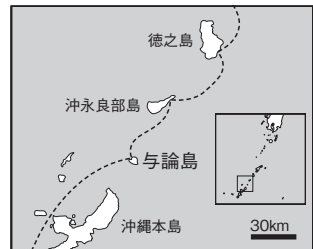
創立50年の与論高校。4,584人の卒業生が全国で活躍している。

平成二八年に学校創立五〇周年を迎え、卒業生は四五八四名を数えます。

● 全学年二学級の存続を目標に

日本各地でみられるように、本町においても人々の意識や価値観の多様化、核家族化の進展など、さまざまな要因により少子高齢化の傾向が顕著になってきています。少子化の進行は、中学校や高校の学級減につながり、ひいては地域の衰退へとつながると懸念しています。

そこで、留学制度を創設し、全国から留学生を募集しようと取り組みを始めることにな



与論島：与論町は、鹿児島県の最南端に位置し鹿児島市の南南西563km洋上に浮かぶ1島1町の町。東は太平洋、西は東シナ海が広がる、総面積20.49km²、周囲23.65kmの小さな島で5,348人(平成28年10月1日現在)が暮らしている。

りました。学校や地域の存続のために離島留学を実施し、その結果、生徒数が増加した島根県立隠岐島前高校や沖縄県立久米島高校などの先進地を参考としながら、平成二十七年五月に「与論中・高等学校全学年二学級存続プロジェクト委員会」を立ち上げました。

役場内の関係各課や、観光協会長、以前に子どもたちの里親を経験したことのある

方々などに出席していただいた会合では、「高校の定数が足りないから与論高校で学びませんか」という消極的な理由で留学生を募るのではなく、島留学先進地として名高い隠岐島前高校のように、生徒が来て学びたくなるような魅力ある高校づくりが第一だ」といった声があがりました。このほか、与論島でしかできない学びの提供、事件や事故のない安心・安全な学習環境など、離島留学の実施に向けさまざまな話し合いがなされました。

◆与論島での教育のメリット◆

- ①**自立の精神** 親元を離れた島での生活を通し、自己判断・決定の場面が増える。これまでいかに親の庇護のもとに生活してきたかを実感するとともに、自立の精神が育まれる。
- ②**感謝の心** 与論島の持つ教育風土（種々の感謝を表す日常生活や諸行事）の中で、自ずと自らが生かされていることに気づき、自然や周囲の人々への感謝の念が醸成される。
- ③**自由と規律** 親元を離れて自由な裁量の時間は増加するが、最終的には自らの規律のある行動が求められることに気づく。
- ④**責任感** 自分の行動が自己責任においてなされることが多くなり、責任感が強くなる。
- ⑤**利他の精神** 島での生活で、他人の優しさや思いやりを感じ、利他の精神が醸成される。
- ⑥**自然への畏敬** 島での生活においては、台風や時化など自然との関わりを意識せざるを得ない。そのため自然への畏敬の念や環境問題などに対する意識が醸成される。
- ⑦**社会貢献** 島でのボランティア活動や、島内各地で行われる奉仕の精神に基づく諸事例に身近に接することで、社会貢献の意識が醸成される。
- ⑧**立志の精神** 夢実現への教育（島立ちの教育）風土の中で、将来の目的を定めて、成し遂げようとする立志の精神が育まれる。
- ⑨**自尊感情** 少人数の学校では、一人一役的な場面も多く、自分が生かされることを実感でき、自己の肯定につながる。
- ⑩**学習意欲** 国・県の中心部から地理的に遠い与論島で、たくましく課題を乗り越えようとする住民の生き方を通して、学習意欲の向上が図られる。

●多様な形態に対応する留学制度

留学形態については、「里親制度」や、民宿の一部屋を改造した「下宿」、「親子留学」などを考え、メリット、デメリットなどを検討しました。現在、里親型と親子型のほか、生徒単独による借家からの通学を加えた三つの形態で、

留学生の受け入れを行うこととしています。

里親の登録にあたっては、家族以外の人と一緒に同じ屋根の下で暮らすという経験がない方が多く、ご理解をいただくのに苦労しました。現在は、三世帯の登録があります。

親子留学は大歓迎で、保護者の就職や宿舍についても相談できる態勢を整えています。このほか、二年後には宿舍をオープンさせる予定（現在、改装中）など、多様な留学形態に対応しています。

里親型のケースでは、留学生を受け入れた里親（下宿）に対して町が月三万円（一人の場合、弟妹は二人目二万円、三人目より一万円）を補助しており、保護者の負担を軽減しています。これにより留学生側の負担は月四万円程度となります。親子留学の場合は、月二万円を上限に家賃の半額補助を行っています。このほか、一年間在学した留学生には、親元へ帰省する費用として三万円を支給するなどの支援体制を整えています。

● 中高一貫校を生かした特徴のある学習環境

与論高校は、県指定連携型中高一貫教育校です。そのため、離島留学は全国の中学生も対象としています。中学生での転入の場合、高校までの在学が原則です。高校からの留学は、一般人試受験となります。編入（中途転入）も可



大金久海岸の1.5km沖合いの海に、大潮の干潮時に姿を現す白砂の百合が浜。

能ですが、この場合は保護者も一緒に転入する必要があります。

同校の特徴は、中学校との連携を生かした学習指導です。一人一人に対するきめ細やかな指導が可能で、特に国語・数学・英語については習熟度に応じた丁寧な指導を実施しています。例えば、放課後の個別添削指導などでは、生徒自身だけでは解決できないつまづきを丁寧に解説しています。また、幅広い進路に対応できるよう、小論文や面接指導なども行っています。インターシップや職業講話などのキャリア教育が充実していることもメリットです。

● 与論島で充実した高校生活を

このように離島留学制度を整備し、平成二七年度に開始しましたが、まだ実績はありません。ただ、留学事業を実施する以前に二名ほど県外からの生徒を受け入れたことはあります（鹿児島県では平成二五年五月、離島や一学年二二〇人以下の小規模校の学区を撤廃。県内外の中学生の進学が可能に）。

将来展望としては、各学年一〇名程度の留学生が常時在学している状態にしたいと考えていますが、まずは留学生

◆学校からみた離島留学◆

与論高校は、「東洋の海に浮かぶ輝く一個の真珠」あるいは「日本列島に残された最後のパラダイス」と形容される鹿児島県最南端の与論島にある、与論中学校との連携型中高一貫教育校である。「教育による島おこし」や「高等学校の設立」を待望する与論町一丸となった熱意に応えるかたちで、昭和42年県立大島高等学校与論分校として定員2学級110名の生徒数をもって開校して以来、本年度創立50周年を迎える。

生徒は、「島の宝」として大事に育てられた、純朴で素直な伸び伸びとした子どもたちである。一島一高、保護者や地域の方々の高校への関心や期待は非常に大きいものがあり、校長として肌で感じている。

折しも創立50周年の今年度、少子高齢化による児童生徒数減少の結果、入学生は35名にとどまり1学級自然減となってしまった。現在、1年生は1学級しかなく、全学年で5学級の小規模の高校である。しかしながら小規模校という利点を活かし、少人数指導や習熟度別指導などきめ細やかで丁寧な授業を実践し、多数の国公立大学合格者を輩出するなど進学実績は高いものがある。

学級減については、早くから危機感を与論町と共有してきた。同町においては「与論中・高等学校全学年2学級存続プロジェクト委員会」を発足させ、事業としての「島留学」制度をスタートし、現在2年目となっている。この制度を利用しての入学には至っていないものの、学校の活性化を図るためにも、ひいては与論島の将来の発展に資するためにも、制度の運用が継続されていくことの意義は極めて大きいものがあると考え。

自然豊かで、触れ合いや温かな人情味溢れる与論島。そして、学びの環境が整ったこの地において「島留学」の趣旨をよく理解した上で、中学校生活を、そして高校生活を送ってもらいたい。学びたい、将来の夢を見つけない、実現したいという志を持つ若者が本校生となり、お互いに切磋琢磨して人間性を磨いていくことが、社会や地域そしてふるさとに貢献し得る人物になるものと確信する。一人でも多くの若者と与論高校での学びを期待したいと考え。

(鹿児島県立与論高等学校 校長 有馬敏彦)

の受け入れを実現することからはじめなければなりません。留学生個人個人の学習意欲を向上させるような与論島ならではのカリキュラムづくり、私生活において諸問題が生じた際、それに対応できるような専門的なアドバイザーがでる人材の確保など課題は山積しておりますが、一歩ずつ着実に進めていけたらと考えています。

本町としては、全学年二学級維持という目標はありますが、全国から与論高校に来た留学生が自己実現を果たし、希望する進路に進んでくれることが何よりです。そして卒業生が島に戻って活躍したり、たとえ島を離れても与論島の応援者になってくれるような地域づくりこそが、島の未来につながるかと確信しています。

田畑豊範 (たばたとよのり)

昭和32年与論町生まれ。同59年与論町入職。平成27年より教育委員会事務局長。与論中・高等学校全学年2学級存続プロジェクト委員会事務局長も務める。